

## 平成五年度 大谷学会研究発表会 発表要旨

## 天台智顛の初期の禪法について

山野俊郎

中国天台宗の開祖である天台大師智顛は、隋代の最も著名な仏教者の一人に数えられる。彼の、南北朝時代後期から隋代にかけての六十年の生涯は、通常、六つの時期に分けて説明されることが多い。すなわち、南北朝末期という戦乱の時代にあつて世間の無常の有様を身近に見、十八歳で出家を決意するに至るまでの幼年時代。次に、南岳慧思禪師の下にあつて法華三昧の修行にとめ、「大蘇開悟」と称される宗教体験を得たとされる修学時代。更に、慧思と別れて金陵の都に出、瓦官寺に在つて諸経論を講義し、禪法修行の指導を行った瓦官寺の時代。そして、三十八歳の折に金陵での華やかな講学生活に別れを告げ、突如として浙江省の天台山に隠棲し、改めて自らの修道に努め、また門人たちをも指導した天台山時代。この時期に智顛は「華頂降魔」と称される重要な宗教体験を持っており、彼の思想的な転回点として注目される。天台山時代の十年間を経て、その後、再び金陵の都に出て『法華文句』を講義し、また故郷の荊州の玉泉寺にあつて『法華玄義』及び『摩訶止観』などを講述した所謂三大部講説の時代が続き、そして、五十八歳の折に故郷を離れ、再び天台山に入つて、亡くなるまでの二年間をそこで過した最晩年の時代へと至るのである。以上のように、智顛の生涯は六つの時期に区分されるが、

このうち、大蘇開悟の後、金陵に在つて経論を講義し人々の称賛を獲得した瓦官寺時代までを、智顛の生涯の前期時代と呼び、そして、三十八歳の折に天台山に入山してより後を後期時代と称するのである。

さて、智顛がその前期・後期時代を一貫して重視した代表的な禪法が法華三昧である。そこで、以下、三十歳から三十八歳に至る瓦官寺時代に彼が講述したり、選述したと思われる著作をとりあげ、そこに説かれる法華三昧の内容や修行方法の特徴に注目してみたい。とくに彼の初期（前期時代）における法華三昧の理解について、師匠であつた慧思の影響がどのように現われているか、あるいは、両者の理解の間にどのような相違点が見られるか、というような問題について考えてみたい。

先に述べたように、智顛は二十三歳の折、その当時に法華経學者として有名であつた南岳慧思を大蘇山に訪ね、彼の指導のもと、法華三昧の修行に没頭し、「大蘇開悟」と称される宗教体験を持つに至つた。この悟りの体験が、智顛のその後の教学思想の展開を完全に方向づけるものであつたと思われる。『続高僧伝』巻十七に取められる智顛伝には、その折の状況が次のように伝えられる。

（智顛は）光州大蘇山の慧思禪師に詣り、心観を受業す。

（中略）（慧）思毎に歎じて曰く、昔靈山に在つて同じく法華を聴く。宿縁の追う所、今復た来れり。即ち普賢道場を示し、為に四安樂行を説く。（智）顛この山に於て法華三昧を行す。（中略）解悟便ち發し、（慧）思師と共に靈鷲山の七宝浄土に処して仏の説法を聴くを見る。故に（慧）思云く、爾に非ざれば感ぜず、我に非ざれば識ること莫けん。此は法

華三昧の前方便なりと。(T. 50. 564B)

このように、智顛は普賢道場と四安樂行とを内容とする法華三昧行を修し、法華三昧の「前方便」に到達したという。これは、法華三昧という最高の真理を完全には達成していないが、それを体得するために必要な、或る前段階にまでは到り着いたということであり、つまり、法華三昧という真理に至るべきプロセスの、途中の或る段階にまでは到達したという意味である。智顛は後期時代に至って、諸法の実相を空諦・仮諦・中諦の三諦の思想によって表明するようになるが、この大蘇開悟においては、三諦のうち第一の空諦のみを証するに留まったことが推察される。

智顛はこの悟りの体験を出発点として、更に七年間にわたって慧思の下で修学を重ねた後、大蘇山を去って金陵に赴き、そこで特に実践的な禅法の講義を行ない、門人たちの禅修行を指導した。この瓦官寺時代の代表的な講述が『次第禅門』(『釈禪波羅蜜次第法門』)十卷であるが、この著述の内容には慧思の思想の影響が色濃く見うけられる。その後、天台山時代には、この山の華頂峰で一人で禅定修行に没頭し、いわゆる華頂降魔と呼ばれる第二の悟りの体験を持つことになる。これによって智顛の法華三昧の証悟は「前方便」の段階を超え、慧思の思想的影響を脱しえたのであり、やがて『摩訶止観』に見られる彼独自の禅思想の提唱へと結実していったと考えられる。

次に、法華三昧という禅法の具体的な内容について、まず慧思の理解を見、次いで智顛の初期の著述のうち、『次第禅門』と『法華三昧懺儀』の二つを取りあげて検討してみたい。

法華三昧とは一般に法華経が唱える真理(「諸法実相」という語で代表される)を悟るための最も重要な禅法と考えられるが、

法華経においては、法華三昧という名称こそは数度見られるものの、その具体的な内容については何も説明されていない。法華三昧の内容の了解は、専ら個々の仏教者の主体性に任せられていたと言えよう。慧思の伝記によれば、彼は慧文禪師の会下にあつて修行していた時に法華三昧の証悟を得たとされる。すなわち、『続高僧伝』卷十七の慧思伝には、彼が法華三昧を体得するに至る過程を、およそ次のように伝えている。

(慧思は) 来夏に於て身を束ねて長坐し、繫念して前に在り。始め三七日にして小静観を發し、一生涯の善惡の業相を見る。此に因つて驚嗟して小静観倍復た勇猛なり。遂に八触を動じ、本初禪を發す。(中略) また空定を發し心境廓然たり。夏竟りて歳を受け、獲る所無きを慨う。自ら昏沈を傷み、生きて空過せるが為に深く慚愧を壞く。身を放つて壁に倚り、背未だ至らざるの間、霍爾として開悟す。法華三昧、大乘の法門、一念に明達す。(T. 50. 562C-563A)

このように、彼の禅定が世間禅から小乗禅へと次第に深まり行き、そして、その深まりの果てに法華三昧の証悟に到り着いたことが知られる。このような悟りの体験をベースに、その後、彼が創作した法華三昧の具体的な行法の内容が『法華経安樂行義』に説かれていいる。すなわち、まず其の冒頭において慧思は、

法華経者大乘頓覺、無師自悟、疾成仏道。と宣言し、そして、

一地より一地に至る者は、是れ二乗の声聞及び鈍根の菩薩にして、方便道の中を次第に修学す。一地より一地に至らざる者は、是れ利根の菩薩にして、正直に方便を捨て次第行を修せず。若し法華三昧を証せば衆果悉く具足す。

と主張する。すなわち、法華経は大乗の頓覚の秘法を説き、速疾の成仏を可能ならしめる教えである。法華経の菩薩は、種々の多くの禅法を浅いものから深いものへと次第に学習し、階位を一地から一地へと徐々に昇る次第行を修する必要はないのであり、法華三昧の一行のみを修証することによって諸地を頓に超え、速疾に仏道を成就できるのである。それが、方便の教えを捨て去った法華経が指示する真実の行法である、と慧思は確信したのである。そして彼は、如来滅後の惡世末世における修行法を解き明した法華経の安樂行品、及び普賢菩薩勸発品の二品に注目し、前者による無相行と後者による有相行の二種行をもって、具体的に法華三昧の行法を組織したのである。

さて、智顛は法華三昧の有相行・無相行の二種行を慧思から伝授され、修習したのであるが、智顛の初期の著作である『次第禅門』においては、法華三昧についてどのような了解が述べられているのだろうか。この著作では、実践的な禅法への関心が頗る強く、また慧思の教学の影響が色濃く反映されている。まず、智顛は、慧思の主張を受けて、あらゆる仏教が禅の一字に収め尽されることを述べ、そして、インドから中国に伝えられた各種の禅法を浅きから深きへと次第に列挙し、修行者がそれらを順次に修すべきことを要請する。また、それらを、煩惱の汚れを伴った凡夫の禅法である世間禅と、二乗が修習する出世間禅、及び菩薩のための出世間上上禅の三種に分類する。智顛によれば、このうち、法華三昧は最上の禅法である出世間上上禅に属し、行者自身の心を觀察の対象とし、直にその本質(心性)を洞察する禅法である。また、法華三昧は法界を偏りなく平等に觀察する非次第の禅法である、と智顛は説く。しかしながら、智顛による以上のような法

華三昧の位置づけや内容理解は、慧思のそれを超えるものではない。

一方、『次第禅門』と同様に、智顛の初期の著作と見られる『法華三昧懺儀』には、法華三昧の具体的な修習法が組織立てて説かれており、この著作は法華三昧の修行の指南書として著わされたものと考えられる。ここで智顛は、法華三昧を修行する者の心構えや修行の段階を十分に区分して説いているが、このうち、第九「誦経方法」が慧思の言う法華三昧の有相行にあたり、そして、最後の第十一「坐禅実相正観方法」の内容が無相行に相当するものと思われる。すなわち、慧思においては、有相行と無相行の二種行が別々に修習するものの様に説かれ、両者の相互関係が不明であるが、智顛のこの著作では、両者が法華三昧行の一つのプロセスの中に組み込まれていることが知られる。ここには、法華三昧を首尾一貫した最上の行法として組織しようとした智顛の意図が伺われるのである。

(本学専任講師 仏教学)